

愛知 13 区
碧南・刈谷・安城・知立・高浜

前衆議院議員

タイトル

新年度予算成立

おおにし健介

7日、令和8年度予算が成立しました。私は、長年にわたり予算委員会の委員を務め、今回も野党筆頭理事を務めた長妻さんの下で次席理事を務めたことありますが、今回の予算審議は、外から見ていても嘆かわしく、自分がそこにいないことに、ほぞを噛む思いでした。

1月に高市首相が衆院解散に踏み切ったことで予算審議の開始が遅れたにもかかわらず、衆議院選挙で圧勝した数の力を背景に、年度内成立に固執した結果、審議日程を大幅に圧縮した異例づくめの審議となりました。

特に、衆議院での審議では、審議時間は過去20年で最短、首相出席の集中審議も過去10年で最短、37年ぶりの分科会の開催見送り、財務大臣が出席しない一般質疑など国会軽視とも言うべき状況で、一方で、野党も世論の批判を恐れて高い支持率を誇る政権への批判に及び腰で、一国民として国会中継を見ている面白くないし、「このままではいけない。自分にもまだ果たすべき役割があるのではないか」という思いを強くしました。

私は、何もダラダラと時間をかけろと言っているわけではありません。国民生活に深く関わる予算の年度内成立には野党もできる限り協力すべきだと思います。一方で、予算案の最大の課題は、物価高対策ですが、昨年末に閣議決定された予算案には、その後に生じたイランでの戦闘の影響による原油高や円安は考慮されていません。また、米国とイスラエルによるイランへの攻撃に対してわが国としてどう対応していくのかは重大なテーマであり、まさに予算委員会の場で時間をかけて話しあうべき事柄です。つまり、早期の成立と同時に一定の審議時間とトップである高市首相自身の国民の代表である国会に対する丁寧な説明の機会を確保することが必要です。この点では、審議時間の確保につながる土曜日日曜日を使った審議を拒否した野党も日程闘争をしているとの批判は免れないと思います。

ただ、与党が4分の3を占める衆院と違い、与野党の勢力がより拮抗している参院では審議が順調に進まず最終的に暫定予算が必要となる可能性は最初から分かっていたにもかかわらず、暫定予算の編成を頑なに拒否して、結果、年度内成立を断念し、暫定予算を組まざるを得なかった政権与党の姿勢にも充実審議への配慮は一切感じられませんでした。

【前衆議院議員 おおにし健介事務所】

〒446-0074 愛知県安城市井杭山町高見 8-7 2F

TEL: 0566-70-7122

FAX: 0566-74-2008

メール office@oniken-web.jp

私が尊敬する大平正芳元首相は「反対党は予備的政府であり、『国民の政府』に対する『国民の反対党』である。強力な政権は、強い反対党によって腐敗から免れる。」という言葉を残しています。衆議院で圧倒的多数を持つ政権だからこそ、野党に配慮する度量を見せて欲しいと思います。

失礼承知で言えば、憲法には予算案を参院が30日以内に議決しない場合、衆院の議決を国会の議決とする「30日ルール」の規定があるため、これまでは予算案が衆議院を通過した後の参議院での予算審議はあまり盛り上がりませんでした。しかし私もつづさに見ていた訳ではありませんが、今回は参議院での審議の方が見るべきものがあつたと思います。実際、通常、衆院の8割とされる審議時間は衆院と同じ約59時間まで積み上げ、集中審議の回数（3回）も衆院を上回り、衆院では分科会審査がありませんでしたが、参院では委嘱審査も行われました。そして、予算委員会での採決では、46年ぶり可否同数で委員長裁決となりました。まさに、これぞ逆の意味で「数の力」であり、二院制における参議院の面目躍如だと言えます。

私は、今回の落選で、政治への国民の意識や選挙のあり方が大きく変わってきており、これまでのやり方は通用しなくなってきていると感じています。いわゆる「ドブ板選挙」の極意を表す「握った手の数しか票は出ない」という田中角栄首相の有名な言葉があります。直接、触れることができる人はよいのですが、昼間は仕事で家にいない、週末も地域の行事やイベントには顔も出さない、新聞はとっていない、テレビも観ない人が多くいて、そういう人々はスマホから情報を得ています。しかし、SNSも一昔前と違い、大量の資金とリソースを投じてアルゴリズムを支配されれば、個人では太刀打ちできず、フィルターバブルの中の人にはリーチできない状況が生まれています。

コスパやタイパを重視する国民は、政治も同じような尺度で測る傾向が強まっているように感じます。しかし、コスパ・タイパで言えば、多数決で結果が見えている国会審議は必要なくなるし、AIがあれば国会議員も要らないということになってしまいます。コスパ・タイパだけで言えば、独裁政治こそが最も効率的と言えるかもしれません。

本来、民主主義というのは、非効率で、めんどくさいものであり、進んだり戻ったりしながら合意形成をしていくことの意義を我々は再認識しなければならないのではないかと思います。

デジタルの活用による効率化やAIの活用などは積極的に進めるべきだと思います。一方で、だからこそ、時間をかけてアナログで生身の人間同士が議論する「熟議」も大切にすべきではないのかと思います。

私も、浪人の期間、国会を離れて外から国会審議を見つめ直す機会としたいと思います。



Profile



▶昭和46年4月13日生まれ

▶京都大学 法学部卒

▶国会職員、在アメリカ大使館二等書記官、衆議院議員 馬淵澄夫政策担当秘書を経て、平成21年第45回衆議院議員総選挙で初当選以来、連続6期当選するも、令和8年第51回衆議院議員総選挙にて惜敗

▶党務では、選対委員長、青年局長、税制調査会長などを歴任

▶国会では、予算委員会ほか、厚生労働委員会、消費者特別委員会、経済産業委員等にて活躍

▶中学生、高校生2人の男の子のパパ
ニックネームは「オニケン」